

ポストコロナの 可能性としての

〈女子たち〉

ディストピアの〈女子たち〉(二)
つくみず『少女終末旅行』

池上貴子

はじめに

マンガという媒体は、私達にリアリティというものがあるまで二義的な価値であり、表現の選択肢の一つに過ぎないことを気付かせてくれる。つまり、リアルとフィクションのどちらに振り切っても自由ということだ。前者の例でいえば、一九四一年に勃発したドイツとソビエト連邦間の戦争をコミカライズした小梅けいと『戦争は女の顔をしていない』一〜二巻(二〇二〇年一月、一二月、KADOKAWA発行)は史実を超えたリアルに肉薄しようとしたタイプの意欲作といえる。原作は五百名にのぼる旧ソビエト連邦女性兵の取材をまとめたルポルタージュで、作者のス

ヴェトラーナ・アレクシエーヴィチはノーベル文学賞を受賞した初のジャーナリストである。

コミック化にあたり、独ソ戦に知識のない読者層にも当時の地理や情勢、事物が理解できるよう作画が工夫されており、洗濯兵や狙撃兵、衛生兵や戦車大隊衛生指導員といった戦場で活動した女性たちの物語をリアルに再現しようとしている。また、その告白を聞き取る女性ライターの物語をも誠実に描きだしている点はルポルタージュとしても良書といえよう。

ちなみに、『戦争は女の顔をしていない』というタイトルが暗示するのは、戦争は男がしかすものという単純な男性批判ではない。作中描かれるのは、戦場という力場に在ること自体において、個の要素たる〈女〉が抑圧され、兵士となるべく変質を余儀なくされていく状況である。たとえば、身体的に「兵士」＝〈男〉に同化させるため、生理中でも何事もないかのように血まみれで行軍した経験や、男性用の下着しか支給されない元女性兵が「戦争で一番恐ろしかったのは……男物のパンツを穿いていることだよ」と証言する場面が象徴的だ。いったん戦争という巨大な暴力装置に入ってしまうと、男女に関わらず、〈男〉を原型とする兵隊として同一化されていく。「女の顔をしていない」のはそのためだ。特に、当時のソビエト連邦はスター

リン体制という全体主義下にあった。女性は大丸刈りの一兵士として戦地で祖国のために戦うことを賛美される教育が徹底されており、どの登場人物も愛国を疑うことがなかった。戦場において〈女〉であり個である必要はなかったのだ。

さて、この〈女子たち〉の個を抑圧し、物理的にも戦死させていくリアルな戦争マンガを念頭に置いて、今回はほぼ真逆の方法で描かれたマンガ作品を取り上げてみたい。それはグロテスクでもリアルでもない、極めて抽象的で感覚的な架空の女子たちの物語である。

作品のタイトルは『少女終末旅行』。「少女」と「終末」と「旅行」というミスマッチした概念が三つ並んだ異化効果抜群の作品だ。内容は、戦争や環境汚染といった社会の葛藤や自然との対立、そして文化の盛衰、そういった「人間の営みすべてが終わった後の世界」を旅する二人の〈女子たち〉の話である。

史実と生々しい身体感覚に満ちた前者のマンガと、身体性を極力排除し空想の世界を夢想した後者のマンガ。両作品は全く違う方向を向いているように見えるが、実は主人公チトとユーリのように、作品の裏側でしっかり手をつないでいる。

一 デイストピアを日常に落とし込む女子たち

戦争の〈物語〉が極めて複雑であり、経済や社会構造の破綻や裂け目に満ちた〈非日常〉のものならば、その世界が崩壊した後の物語は恐ろしいほどシンプルで、〈日常〉的なのではないか、という乾いた思考による実験。世界崩壊後の世界、いわゆるデイストピア漫画である、つくみず『少女終末旅行』は、二〇一四年二月―二〇一八年一月「くらげバンチ」で連載され、新潮社よりコミックが発行された（全六巻）。少女二人が終末世界を旅するという〈萌え〉を意識したコンセプトは当時注目され、アニメ化や他作家が公式アンソロジーを出すなど広がりをもせることとなった。

作品の時代設定は、我々読者が「古代人」扱いされるほど遙か未来の話。環境汚染が進み、戦争や紛争を繰り返した果てに生物は死に絶え、人間もほほいさない。各所には〈都市〉と呼ばれる多層構造の建造物が密集するエリアがあるが、古代人（つまり現代の我々）からの文明を積み重ね続けたその殆どはガラクタとなり、かつて高度だった都市機能は終わりを告げようとしている。その〈都市〉を、前身はバイクで後身は戦車のような半装軌車「ケッテンクラート」に乗って、二人の少女チトとユーリは残された食料を求めて移動していくのである。

彼女たちは常にお腹がすいているにも関わらず、丸く